

2025年8月の総評に代えて

○林 桂 ○

●さいう●(石川県 20歳)

手はいつも孤独の器官
分かち合う
ために
花環になるわたしたち

【評】「手はいつも孤独の器官」。ゆえに手は、その孤独を癒やすためにあらゆる交渉を持とうとする。手を孤独の器官と捉えたことで成立する。

●田崎森太●(神奈川県 74歳)

秋立って老人に増す作話癖

*コルサコフ症候群

【評】ある心理学者が、トランプ大統領の言動を評して「コルサコフ症候群」の兆候が見えると述べているのを見た。こここの「老人」は、あるいは自画像なのかもしれないが、私が見たのと同じ情報を踏まえて書かれているのではないかとも思う。

●中原 紘 ●(山口県 21歳)

桃を剥く
露出してしまえばすぐに
酸化してしまう僕らの血液だった

【評】桃は最も傷みやすい果物。皮を剥いてしばらくすれば、色が変わる。私たちの血にもその類似性を見つける。体内を巡るときに保たれていた血の状態は「露出してしまえばすぐに／酸化してしまう」のだ。色は変わり凝固してしまう。体内という環境が血を保っていることに改めて思い至る。

●早瀬はづき ●(大阪府 21歳)

さるすべり
噴き出すように咲き交って
あふれだすのはいつも内側

【評】「さるすべり」の咲き方を「噴き出すように咲き交って」と巧みに描写した上に、「あふれだす」ものは常に「内側」からのものだと敷衍する。

●川上 真央 ●(東京都 18歳)

ペんぎんが夏天に晒している十字

【評】「十字」は、つばさ(?)を広げているペんぎんの立ち姿をそのまま見立てたものだろう。「夏天に晒している」はたたむことのないつばさを描く。恐らく過酷な「夏天」が生活圏ではないペンギンの動物園での生活の一こまとして描いているのだろう。「十字」の見立ては十字架を踏まえているか。

●鶯浦 るか●(富山県 63歳)

特攻兵こいぬの温みにほほよせて

【評】数人の特攻兵が、小犬を囲んだ出撃前の記念写真がモデルだろう。この写真の後で、生きているのは小犬だけだったんだろうと思うと胸が塞ぐ。特攻基地知覧で撮られた写真で、知覧平和記念館で最も知られた写真だ。中心にいたのは十代の若者。成績優秀で特攻兵に抜擢されたと説明される。

●松下 とら●(大阪府 58歳)

川沿いの露天湯
無患子の木陰
指先でなぞる右胸の痕

【評】「右胸の痕」は、乳房の切除の手術を受けたということなのだろう。ムクロジで囲わ

れた露天湯は、自分自身に向きあう静かな時間となっている。

●川上 比奈●(千葉県 22歳)

夏になると思い出す
窮屈で自由だった僕の世界

【評】「窮屈で自由だった僕の世界」は、少年（少女）時代を言い止めたものだろう。小学生くらいの世界か。生活にいろいろの制約を大人から受けながらも、心は自由の世界の住人だった。

●夏山 栗 ●(東京都 34歳)

観覧車 しづかに煙る遠景の
くだりのほうが長かったこと

【評】「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」（栗木京子）を想起させる。「くだりのほうが長かったこと」は巧み。栗木の作品が現在形ならば、この作品は回想的ではある。

● 鮎 ●(石川県 19歳)

まどぎわで
犬をなでつつねむるとき
せかいはすべて
こもれびのゆめ

【評】「せかいはすべて／こもれびのゆめ」は巧み。現の儂さをいろいろな比喩で言い止めてきたが、これも至言のひとつとなるだろう。

● 上原一樹 ●(群馬県 19歳)

草の花 荷物少なく引越して

【評】「荷物少なく引越して」は、身軽な若者を想起させる。学生や寮生活者など。年を重ねるにしたがって、要不要の物品が増えて、引っ越しも不如意になる。この身軽な生活スタイルの方が、幸せなのかもしれない。そんなことを思わせる。「草の花」は、秋の季語。野の花が咲く様をいうのに使われる。取り合わせとして巧み。

● 小西電波 ●(北海道 18歳)

うっすらと負け続いている
ねむらない大学の守衛室の灯り

【評】「うっすらと負け続けている」の「うっすら」は、何かしらの勝負をして明確に勝敗がついたという「負け」でないことを示している。ぼんやりとした敗北感の日々を言うのであろう。夜を点し続ける大学の守衛室の灯りにも、同質の世界を感じ取っているのだ。